

トピックス

1. 播州日誌「ウクライナを想う」

2. 南国土佐を後にして 第8回



福留経営労務管理事務所

姫路龍馬会

社会保険労務士・行政書士

福留章

龍馬通信

No. 63

2023年 3月号

雨水～啓蟄の候

早春賦

水ぬるみ

春に先駆けて咲く花

スイセン 菜の花 ふきのとう 雪割草

ネコヤナギもふくらんで

遠慮がちに咲く梅の花

あわてんぼうの河津桜

明るい陽光と 柔らかな春の雨

雪消しの雨 甘雨 慈雨

木の芽お越し

植物の多くが 萌え出ずる季節

鳥はさえずり 魚は群れ遊ぶ

小さき命の虫たちも

這い出て春の風を聴く

春めきを小さなものほどしたたかに



三寒四温

春の嵐 春一番吹き荒れて

花粉症の季節

スギやヒノキがまき散らす

くしゃみ 鼻づまりに ご用心

人みな生きて 尊き命

感謝と歓喜

喜びと幸せを感じる季節

終わりと始まりの季節

待ちわびた 春が来た 春が来た

そして 山笑(わら)う



播州日誌

ウクライナを想う「戦争に勝者はいない」

2022. 2. 24ロシアのウクライナ侵攻。世界を20世紀に引き戻すような出来事。

嘗々と築き上げてきた国際秩序が、まるでレンガ造りの家の様に崩れてしまう。

「戦争に勝者はいない」「武力による現状変更はこれを許さない」

国連の無力さは、国連の組織の改革なくしては解決しない。およそ世界が一つにまとまるなんて、無理な希望かもしれない。いわゆる2大大国の対立は必然のものであり、各国はそれぞれ自国の国益に沿って動いている。

ウクライナを支援すると言っても、各国に温度差があり、各国の都合が優先する。

いつの間にか米中の代理戦争の様相に変わりつつあり、早期の終戦は望むべくもない。

朝日新聞 現地取材400日で見えた「ウクライナ侵攻10の焦点」を読んだ。取材班の現地ルポで、生々しく惨状を伝えている。現地住民の声を取材しているので、その点でも信頼できる。その中でも「虐殺」の項が衝撃的であった。4月2日「キーウ州全域の解放」宣言。ロシアの侵攻に対する世界の認識が変わった局面の一つ。

「ほぼ1か月にわたって、ロシア軍に占領され、何が起きていたのかわからなかった地域に、ウクライナ当局や報道機関が入り、現地の様子を映像や写真で伝えた。以降民間人への拷問、大量虐殺、虐殺の疑いが次々と明らかになった。21世紀の欧州で、これらむき出しの暴力による破壊が起きたこと、それらを防げなかったことの衝撃は、安全保障の態勢や認識をも一変させた。」同本82ページ。

首都キーウ近郊の町ブチャの「ヤブロンスカ通り」は後に「死の通り」と呼ばれるようになる。その通りには民間人の遺体が散乱し、一部は腐敗し、野犬に食べられた後も。民間人の大量殺人（ジェノサイド）が行われた可能性が高い。処刑場や拷問部屋の後も。掘り起こしても、掘り起こしても尽きない遺体の多さに、当局も困惑している。読み進むにつれて怒りがこみあげてきて、何度も本を閉じた。言い知れぬむなしさがこみ上げてくる。人はここまで残虐になることができるのか。究極の戦時下とはいえ、何故に民間人に何を拷問するのか。どう答えても結局は射殺される。絶望の中で妻や子の名を呼びながら死んでいった人はどんなに悔しかっただろう。後ろ手に縛られ後頭部を打たれる屈辱。女性の性被害についても証言を得ているが、もう読むのとはばかれるような悲惨なもので、筆者はここに書くことができない。ロシアのプーチン大統領とロシア国民は、少なくともこの真実について納得のいく釈明をしてほしい。

人間性を徹底的に崩壊させてしまう、戦争という極限を起こしてはならない。各国が戦争回避のために、政治的経済的にも叡智を結集して平和を希求しその実現を果たさなければならない。

1年を経過しても出口の見えない戦争が今も続けられ、毎日のように多くの兵士や民間人が、理不尽な死を迎え傷つき倒れていく。

もう一度繰り返す「戦争に勝者はいない」。

2023. 2. 21





創作 ショートストーリー 「犬死」(いぬじに)

それは、それは楽しい日もあった。子犬の頃は、頬すり寄せて「かわいい」「かわいい」と抱きしめられた。わざと小首をかしげたり、ころりと倒れてみたり、首を2回ほどふって、眠たそうにして見せたりすると、人は喜んで私を撫でまわし抱き上げた。一番幸せだったのは、散歩の途中、だだっ広い草むらのある所で、リードを外してもらい、しばらく自由にしてくれた時だ。私は我を忘れて、とにかく駆けた駆けた、走った走った。力の限り。青空の端までも行く勢いで。草むらの葉が頬を濡らし、脚も少しは痛かったけど。ハアハアゼイゼイと息が切れそうになるまで思い切り走った。ほんのしばらくの時間だが、それが至福の刻だった。そんな夜には決まって母親の夢を見た。「よかったね」と私の顔をぺろぺろなめてくれた。そして母親の胸に抱かれて眠った。



幸せな時間は短い。成長して大きくなるにつれ、私の手と足そして体のバランスが、何となく崩れ、はっきり言って、かわいくなくなった。それは所詮、雑種だったし、それに野良犬だったのだから仕方がない。あれほど可愛がってくれた子供も寄り付かなくなり、やがて散歩も間遠くなり、繋がれたまま、食事だけを待つ毎日。すっかり厄介者になってしまった。誰が悪いわけでもなく、ひたすら自分の運命と思うしかない。

ある日思い切って鎖を断ち切って塀を超えて脱走した。つかの間の自由、開放感。何のことはない、しがない「野良犬」になってしまった。大型犬とつまらない喧嘩をして、肩や背に傷を負った。体を洗うこともないから体臭がひどく臭った。食事は何とかなったけど、時には腐ったものを食べて、死ぬほどのたうち回ったこともあった。夢も希望も無くなったこの身に世間は冷たく自然は厳しかった。

ボロボロになって、たどり着いた田舎の田んぼ道。

ガツーンと強く頭を打った。轆かれたというより撥ねられたという感じ。目の前が真っ赤になり、やがて真っ黒になった。死んだのか、確かに死んだのだ。「死」という言葉が頭をよぎり、それが現実のことだとわかるのに時間はいらなかった。爺さんが運転する軽トラにはねられて、わずか4年ほどの人生が終わった。何だったんだろう私の一生は。悲しいことや苦しいことばかりの人生。幸せだった時間の何と少なかったことか。

田舎道だけにだれも死体を片付ける者などいない。天空から自分の死体を見ている。青い月夜など矢張り悲しみが押し寄せてきて涙がこぼれた。その一しずくが顔に当たるように切なく思ったりした。太陽の光にさらされ、風に吹かれ雨に打たれて、死体はやがて小さく小さくなっていった。小さく・・・小さく・・・。風塵にまかれ骨は飛び散り、皮一つになり、やがて指先の一握りの粉塵となり、最後は風に吹かれて空中に散った。私のすべてがこの世から消え去り、悲しみだけの魂が残った。

犬の死 「犬死か」

声にならない声を最後に発する。

「ワオーン」人には聞こえない、最後の一声。

それも、深い夜の静寂(しじま)のなかに、むなしく 消えた・・・。



～南国土佐を後にして～

第8回 「高知編」

東京オリンピック

高校受験は、初めから公立に決めていた。県立高知小津高校を受験。レベル、競争率とも並みであったので、合格の自信はあった。早春の受験の季節。教室から窓の外を見ていたら、珍しく着物姿の母親が校庭にたたずんでいる。ちらっと眼があったので、手を振ったら教官に怒られた。試験終了後母からもきつく叱られた。生まれてこの方母親に怒られたのはこの時が最初で最後。この後怒られた記憶がない。兄弟姉妹6人の中でも、特にかわいがられたような気がする。

無事に合格し、高知小津高校1年生となった。まあ大して有名な人は出ていないが、しいて言えば4代目朝潮太郎。小津高校から近畿大学を経て大相撲へ。名大関といわれて、のちに高砂親方。ひょうきんなタレント性を発揮して、人気を博した。特に強いスポーツクラブがあるわけでもなく、有名大学への進学校でもなく、至って平均的な学校だった。校訓は「質実剛健」自由の気風に富む学校で、土佐藩の国主、山内家が興した学校だった。NJさんは女子高の丸の内高校へ、初恋は自然消滅となった。

1964（昭和39）は、混迷と緊迫の世界秩序といわれた1960～1964年の最終年にあたる。

何といてもこの年、日本が先進国入りを目指して、国の威信をかけて開催したのが東京オリンピックである。アジア初ということもあり、93の国と地域の参加を得て、華々しく展開された。東海道新幹線が開業し、海外旅行も自由化された。世界的には流動的で厳しい経済情勢の中で、日本は着実に発展し、まもなく先進国入りを果たした。

当時私は学校から依頼を受けて新聞委員会の委員長をし、年に2～3回学校新聞を発行していた。JOCから全国の高校生の代表に開会式への参加要請があり、大方の学校は生徒会長、副会長あたりが学校代表となった。後になって聞いた話では、観客が少ないのを心配してJOCが高校生に動員をかけたとか。その功あってか開会式は立錐の余地もない状況だった。それはともかく開会式が迫った9月の下旬、ひょんなことから私にとっては千載一遇のチャンスが巡ってきた。生徒会長の某君が、喫煙しているところを教師に見られ、2週間の停学処分を受け、学校代表も取り消された。新聞委員長をやっていた関係で私が指名され代打で学校代表ということに。旅費個人負担8000円余りを親爺に頼んで出してもらい学校代表の荣誉に浴した。

新幹線には乗せてもらえず、往復とも寝台夜行列車、宿泊先は代々木にあった青少年トレーニングセンター。3泊4日であった。

10月10日は見事な青天。開会式は感動の連続であった。青空に描かれた五輪のマーク、一人選手の入場行進、坂井選手の聖火点灯が最高だった。感動で胸が苦しくなり、喉の奥がくうくうとなって涙がこぼれた。後は主に東京見物。皇居、東京タワー、浅草などを巡った。上京中、新聞社の取材もあり、インタビュー記事が高知新聞に数回掲載された。いい経験だった。

東京オリンピックは成功裏に終わったが、その間世界は戦争の危機に見舞われていた。8月2日、ベトナムでトンキン湾事件を起こしてアメリカが参戦したこと、そして翌年2月に北爆を開始したことにより全面戦争に突入。泥沼化したベトナム戦争は1975（昭和50）年まで続いた。日本の好景気は続き、4年後の大阪万博まで突っ走った。坂本九が歌った「明日があるさ」「見上げてごらん夜の星を」「幸せなら手をたたこう」などがヒット、一世を風靡した。

